

<目的>今日靴は、その機能性よりもファッション性が重視されるような傾向が強く、その結果特に婦人靴では障害に関する多くの報告がみられる。その障害は中年以上の婦人に多くみられ、高齢化の進む我国では深刻な問題となりつつある。足は人間生活の基盤であり、年齢の移行による足蹠および重心の変化を追求することは、急激に進む高齢化社会におけるはき物への対応の上で、重要な役割を果たすものと考え本研究を行うことを目的とした。

<方法> 1. 被験者 女子学生113名 老人女子50名 2. 実験 1) 足蹠に関する実験  
ピドスコーフ(接地足蹠撮影装置)により足蹠を撮影し、足長・足幅・足底部面積・土ふまず面積の測定を行なう。2) ヒール高の違いによる重心の移動に関する実験 0, 3, 5, 7cmのモデルヒールを用い、両足立ち、片足立ちの重心をキネシオプレートを用い測定を行なった。

<結果> 1. 足蹠に関する実験 ・身長と足長には相関関係をみる。 ・土ふまず面積: 足底部面積 学生  $1/4$  老人  $1/3$  ・足指部面積 学生 < 老人 ・跣趾角 学生 > 老人 (老人は足の変形者が多い) 2. ヒール高の違いによる重心の移動に関する実験 ・重心動揺面積 学生 < 老人, ヒール 0cm < ヒール 7cm ・重心の揺れ 学生 < 老人 (老人はヒール高による影響は無関係) ・重心動揺距離 学生 < 老人, ヒール 0cm < ヒール 7cm ・重心の位置 ヒールが高くなることにより前へ移動する ・片足立ち 老人の9割近く困難。